

拾ったのが 本当に猫かは疑わしい5

ねこ沢ふたよ Nekosawa Hutayo



アルファポリス文庫

登場人物紹介

○本田薫^{ほんだ かおる}

モドキの飼い主。経理部で働く、ちよつとガサツな会社員女子。

○モドキ

猫かどうか疑わしい、人語を喋る猫モドキ。黒白の縞々の長毛種。薫が拾ってモドキと名付けた。

○本田優一^{ほんだ ゆういち}

旧姓は柏木。薫の夫。獣医診療所で働きながら、大学院に通っている。

○本田理歩^{ほんだ りほ}

薫と優一の娘。イヤイヤ期真っ盛りの二歳児。動物が大好き。

○マロン

薫とモドキに保護されたトイブードルの女の子。

○おソノ

優一の祖母。獣医診療所の所長。

○柿崎ひとみ^{かきざき}

薫の親友。会社の係長。頼れる姉御肌。

○松本幸恵^{まつもと ゆきえ}

薫の元カレを奪った会社の後輩。

○遠藤さん^{えんどう}

薫が理歩の保育園で知り合ったママ友。ミステリーが好き。娘は美沙。

目次

第一章	拾ったのは、ゴタゴタする日常かもしれない	5
第二章	拾ったのは、猫又モドキかもしれない	61
第三章	拾ったのは、楽しい日々かもしれない	114
第四章	拾ったのは、頼ってもいい相棒かもしれない	157
第五章	拾ったのは、成長する家族かもしれない	225

第一章 拾ったのは、ゴタゴタする日常かもしれない

七年付き合った浮気彼氏にフラれた寒い雨の夜。

私、本田薫^{ほんだ かおる}は、猫かは疑わしい、とても奇妙な生き物を拾った。

猫モドキの「モドキ」と名付けたそれは、姿形は猫だけれども、人間や様々な動物の言葉を理解し、喋り、時代劇^{じだいげき}とビールを愛する、なんともオヤジ臭い不思議な生き物だった。

——猫モドキを拾ってから五年。

トイプードルのマロンが家族になり、獣医師^{じゆういし}の柏木優^{かしわざ ゆういち}と結婚して、可愛い娘の理歩^{りほ}も二歳になった。

毎日忙しいけれど、意外と頼りになる猫モドキに見守られて、私は愛する家族と一緒に、とっても幸せな日々を送っていた。



「ダーリンと二人だけで見つめる海に夕日が沈んで、辺りが真っ赤に染まるんです」
会社の事務室で仕事中心だというのに、うっとりとして幸せそうに語るの、数日間の休暇明けで経理部の後輩、幸恵。

お土産だというマカダミアナッツを配りながら、グリーンフラッシュがどうの、プライベートビーチがどうのと幸せそうに私の横で熱弁している。

四月になって有休が復活した途端に速攻長期休暇を申請して、元IT社長の夫と数日間の海外旅行に行き、豪華クルーズ船に乗ってきたらしい。

びっくりしたのよね。

あの朝、突然メールが来てさ……

『薫さん！ ダーリンがクルーズ船のペアチケットに当選したんです！ 今日から三日間お休みします！ 部署の方々には、上手く誤魔化しておいてくださいね。お土産買って帰りますから！ 松本幸恵』

いや、無理だから。誤魔化すなんてできないから。

そもそもリスクを負って誤魔化してあげる義理も義務も何もない私は、幸恵の送って来たメールをそのまま係長の柿崎に転送した。

柿崎はメールを読んで怒り狂っていたが、当然だ。検索した結果、そんな当選してすぐに行けるような都合の良い海外クルーズは見当たらなかった。当選したなんて絶対に嘘だと思うけれど、本人はいない。確かめる術はなかった。

幸恵に任せていた仕事を慌てて確認したり、他の人に割り振り直したりと、柿崎は大忙しだった。

私だって、幸恵がその三日にこなすはずだった仕事の一部が突然回って来て、あたふたしたものだ。

もちろん、幸恵が有休を取ることに、問題なんてない。

私も自分の都合で休むことはあるもの。

でも、それなら体調を崩したり緊急だったりしない限りは、朝に突然電話やメールで連絡してくるとかは避けてほしいのだ。

幸恵には何度言っても一ミリも伝わらないけれど。

「ああ、仕事だなんだって全くつまらないことに囚^{とら}われる人間って、なんてちっぽけでつまらない存在なんだろうって、しみじみと自然の雄大さに感動しました」

幸恵が隣のデスクで自然の素晴らしさを切々と語る。

ずいぶんノリノリだが、それ、職場で言うことだろうか。

悪かったな、全くつまらないことに囚^{とら}われるちっぽけな人間で。

幸恵はずっと幸せそうに話し続けているが、ここは、そのつまらない仕事をするための場所なのだよ。

朝一で柿崎に呼び出されて怒られていたみたいだけれども、幸恵はちつとも悪いとは思っていないさそうだな、これは。

「ね、いいからさ。仕事しようよ」

私も暇^{ひま}ではない。

さっさと仕事して、帰りたい。

定時で帰って、理歩とモドキとマロンと優一さんに癒^{いや}されたい。

幸恵の自慢話よりもずっと大切だ。

「もう！ 薫さんったら！ 私の豪華旅行が羨ましいからって、ちよつと冷たくあり

ませんか？」

幸恵がむくれる。

相変わらず、私の提案は無視かよ。

てか、羨ましくって仕事しようと言っているわけではない。

「いい？ ここは職場。仕事する場なの。そして、私は定時に帰りたいの」
完璧な正論だ。

これ以上ないくらいの正しい意見に違いない。

「でもお……自然に抱かれてこそ、人は大きく成長するんです。クルーズのときも、ダーリンったら私の手をギュッと握って将来の夢を語って……」

ゆききええー！

本当、そろそろ勘弁してほしい。

とりあえず幸恵には、溜まった書類の束から目を背けるのをやめて、そういう部分から成長してくれると助かるのだけだ。

「ちゃんと仕事して！」

ほら、柿崎から注意されたじゃない。

上司である柿崎に言われて、仕方なしに幸恵が席を立つ。

「薫さんは生活にゆとりつてモノを取り入れて、心のデトックスをしたほうがいいんじゃないですか？」

ふふん、と幸恵が笑って自分の席に戻っていった。

いや、なんで？

デトックス、関係なくない？

思わず、私、デトックスの意味を検索しちゃったじゃない。

……でとつくす。

不要物質や毒素を取り除くこと。

とりあえず、今は、幸恵の長い長い自慢話を一番取り除きたいかな？



幸恵に旅行自慢をされた夜、私はお家のリビングで愛しい家族と団らんしていた。私と夫の優一さんと二歳児の娘、理歩。それに猫モドキのモドキとトイプードルの

マロン。

大切な私の家族だ。

「間違はなくマウントじゃな」

猫モドキが断言する。

モドキは猫タワーの最上部で香箱こうばこすわ座りして、私を見下ろしていた。

私は優一さんの作ってくれた夕食を口に運ぶ。

ふんわりした卵に包まれたチキンライスには、生のトマトが賽さいめぎの目切りで入っておい美味い。

隣では、先ほどまでケチャップで可愛い猫が描かれていたオムライスを破壊しながら頬張る二歳児の娘、理歩がいる。

お食事用エプロンもお口の周りもケチャップで真っ赤な理歩は、満面の笑みである。優一さんは、オムライスを楽しそうに食べる理歩に目を細めている。

リビングのソファでは、トイプードルのマロンがスヤスヤ寝息を立てている。

実に平和で幸せな我が家の食卓。

そんな平和な夕食時に、つい今日職場であったことを話したら、猫モドキに『マウ

ント』だと言われたのだ。

「別にさ、マウント取る必要なんてないじゃない」

だって、しがない平社員同士よ？

社交界の人気を争う令嬢同士ではない。

社交界ならば、マウントを取って頂点を目指すことで王太子の寵愛を得るとかメリットもあるだろうが、ここは現代の日本だ。

経理部女子の頂点に立ったところで、なんのメリットもないはずだ。

……うん、ちょっと考えてみたけれど、なんにもない。

「甘い！」

モドキが言い返してくる。

なんだよ、甘いって。

「良いか、薫。世は戦国。この戦乱の世において人と争うは、至極当然！」

「待って、さすがに戦国はおかしいってば」

危うく猫モドキの口車に乗るところだった。

絶対違うから、戦国。

どう考えたっておかしいから。

だってほら、武将いないし。

武将がないなら、戦国ではないでしょ。

「甘い！ よく考えてしろ！」

「えええ……」

考えたって、戦国は出現しないんだけど。

「ああでも、ビジネス的には、戦国時代に喩えられることはたまにありますよね？ほら、人生論とかで武将の言葉が引用されたりもしますし」

猫好きで、猫の言うことに逆らうことを知らぬ夫、優一さんが、モドキの意見に理を見出す。

「さすがは、優一。良き猫下僕じゃー！」

モドキは満足そうだ。

喉をゴロゴロと鳴らして喜んでいる。

モドキに褒められて優一さんも嬉しそうだが、惑わされないで。下僕と呼ばれているから。

「まあしかし、あれだな。うん。薫がマウントを取られるのは可哀想じゃな」

「は？ いや、別にいいけど……」

「何を言うか。下僕の不名誉は、これ儂^わの汚名にも繋がるというものじゃ。どれ、儂が一つ、豪華クルーズに負けぬ旅行先を提案してしんぜよう……」

別にいいと言っているのに。猫モドキが、何やらおかしい。

どこに隠していたのか、ゴソゴソとチラシを取り出し、渡してくる。

「何よ、これ」

ええつと『城址公園』……？

モドキが渡してきたのは、城址を保存利用した公園施設の案内だった。

チラシによると戦国時代の天守跡を整備し、リニューアルオープンしたらしい。

「あ、これ保育園で配ってたチラシですね。入園割引券が付いていたんですが、ちよつと遠いですし、興味ないかと思って捨てたんです」

チラシを覗き込んだ優一さんが思ひ出す。

なるほど、確かにウチではセレクトしない行き先だ。

優一さんが捨てたのも頷ける。

モドキは、紙ゴミの束からこれを見つけて拾ったんだ。

「し、しかし。本物の城址じゃぞ？ 悠久^{ゆうきゅう}の時の向こうで、そこに確かに城主が眼下に領内を見廻し^{みまわ}、守っておったのじゃぞ？ 素晴らしいではないか！」

なるほど……要は、このチラシを見かけてモドキが行きたくなったってわけね。

普通の猫は、旅行なんて嫌う。

だってお家が縄張り^{縄張り}だものね。常識だ。

むしろストレスになるから、お家から出さない方が良い。

でも、猫モドキにはどうやらそんな常識は通用しないようだ。

普段から大江戸愛であふれるモドキは、チラシを見て本物の城址とやらが見たくなつたのだ。

ああ、幸恵のマウンツの話を利用して、私が旅行に行きたくなるように仕向けたのだな。どうりで戦国だなんて無茶苦茶なことを言い出したわけだ。

「でも……遠いよ、ここ」

ご近所だったなら、もちろん連れて行ってあげたつていい。

だけどこれ、距離的に一泊か二泊しないと行けないでしょ。

ワンコのマロンも幼い理歩も一緒に行くのに、まだ知らないところに宿泊するのは不安だ。

絶賛トイレトレーニング中で、オネショ魔神の理歩が万一ホテルの布団を濡らしたら申し訳ないし、マロンはモドキとは違って普通のワンコだから、ストレスになったら可哀想だ。

「むむむ……ダメか……」

モドキが耳の先を左右に向け、イカ耳になる。

珍しくしゃげている。

こ、これは……ダメって言いにくい。

「か、薫さん。ちょっと考えてみましようか」

モドキのしゃげた顔を見て、猫ガチ勢の優一さんが、先に折れる。

よ、弱すぎるぞ、優一さん。

「お母ちゃん……モドキ、可哀想？」

優一さんの猫好きDNAをガッツリ受け継いだ理歩が、うるうるお目々で見てる。

「クウーン」

わ、待って。

さっきまで寝ていたマロンも足に擦り付いてくる。

足が！ぬくぬくのモフモフ攻撃で絆^{はだ}されていく。

「わ、分かったわよ。ちょっと考えてみるから」

私があっさり白旗を掲げるまで、そう時間がかからなかったのは言うまでもない。

目を細めて「楽しんじゃ」と笑う猫モドキの策略に、はまった気がする。いや、

さっと気のせいではないはずだ。

「行くなれば兵站^{へいたん}を考えねばの」

モドキ、今なんて？

「へいたん？」

耳慣れなさすぎるモドキの言葉に、私は聞き返す。

この人生において、へいたんは『平坦』くらいしか聞いたことがないが、文脈的にさっと違うだろう。『平坦』では全く意味が通じない。

「ネットによると『戦^{いくさ}の軍備』みたいだ。馬とか、兵糧^{ひょうりょう}とか」

優一さんが、スマホで調べてくれる。

兵糧とか……？

私の頭の中で開戦のほら貝が鳴り響く。

いや、どこに行くつもりだよ。

城址公園にはかつて城が存在したかもしれないが、タイムスリップはしないの。
城は存在しない。

「重要であろう？ 兵を動かすのに兵站がお粗末では、負け戦じゃ」

「待って、ドヤ顔しているけれども、今度こそ必要ないと思う。だって、ただの家族旅行計画だもの」

家族旅行に兵站は必要ない。

我々本田家一同は、今のところ、どことも戦をする予定はないのだ。

「普通に準備して、普通に旅行すればいいのよ。そうね……理歩が泣き出したときにどうするかとか、マロンも遊べるように考えるとかは必要だろうけれども。別に兵糧とかは考えなくていいじゃない」

「甘い！ 甘いぞ薫！ 良いか、戦に不慣れな者は戦略を語り、戦上手は兵站を語るのじゃ」

バンバンと猫タワーの最上部床を肉球で叩いて主張する猫モドキには悪いが、戦上手になる予定もない。

てか、誰の言葉だよ。

「また孫子^{そんし}おじさんの言葉？」

モドキは猫のくせにやたら孫子の言葉を引用したがるが、今回もそうだろうか。孫子とかいうおじさんの言葉は、現代の生活に妙に馴染^{なじ}むし、案外役に立つ。

きつと、孫子が現代に生きていたら、ベストセラーのハウツー本を書くか、ネットに生活に役立つライフハック動画をアップして、一世を風靡^{ふうび}していたに違いない。

「あ、いや。孫子も兵站は大切にしておったが、今回は違う」

「まあいいや。誰でも」

いずれにしても知らないおじさんの言葉だろう。

「ともあれ、現地であれこれ考えるよりも、先に考えておくべきなのじゃ」

「まあ、それは分かるけれども」

それでも、普通の準備でいいでしょうが。

モドキは大げさなのだ。

「お母ちゃん……ご飯ナイナイ……」

お口がケチャップまみれの理歩は、そろそろ食べるのに飽きてきたようで、お皿を自分から遠ざけ始める。

うーん。

まだ少し残っているんだけどな。

ブロッコリーが一個と、ジャガイモ一個。

あとは、オムライスが一口。

「もうちょつとだから。食べちゃおうね」

「そうですよ、理歩。ほら、一口」

フォークでジャガイモを刺して優一さんが理歩の口に運ぶが、機嫌きげんの悪くなつてしまった理歩は、簡単には口を開けてくれない。

首を横に振って、イヤイヤし始める。

「完食させたほうが良いんでしょうけれども……弱りましたね」

栄養的には、これだけ食べれば大丈夫なはずだけど、完食することの大切さは理歩にも覚えてほしい。

「プリン、食べる！」

うっ。見つかつていたか。

スーパーで買ったプリン。ご飯を食べ終わった後で出してあげるつもりだったが、冷蔵庫に入れたときに目にしていたのだろう。

「ダメ。全部食べなきゃ、プリンはあげられません！」

ここは、理歩の将来のためにも拒否するべきだろう。

「や！先にプリン！」

絶対にダメ。だって、先にプリンを食べて、残りのご飯を食べる未来が見えない。

だが、理歩の目にはみるみる涙が溜まっていく。

これは……イヤイヤ二歳児発動まっしぐらか？

「ワン！」

マロンが理歩の機嫌を取ろうと、気にかけてくれるが、理歩はプイッとそっぽを向いてしまった。

お家でこれなんども。

やっぱり遠くにお出掛けなんてまだ無理なんじゃないだろうか。

電車で大泣きし始めたら、どうしたら良いのか……

「理歩よ。ほれ、これを見るのじゃ！」

モドキがかざしたのは、デザート用のスプーンだ。

え、いつの間に猫タワーの上に？

「ちよっとそれ！」

「だから甘いと言うのじゃ、薫よ。僕はプリンを冷蔵庫に仕舞うのを見て、理歩が欲しがると思し、一手打っておいたのじゃ！ 備えの意識があれば、どのような事態にも対応できる。これぞ兵站じゃ！」

「え、すごい」

「モドキちゃん、格好良いです！」

それが兵站というのは分からないが、理歩の行動を予想できるなんてすごい。

なんか兵站とやらとは微妙に違う気が若干しいでもないが、なんかすごい。

「毎回、毎日、食事のたびに似たような事態になるのに、予想できぬわけがなかるう」
モドキがドヤ顔する。

「理歩よ。スプーンを助け、プリンを手に入れるためには、その悪漢、オムライス

一味^{いちみ}の残党をやっつけねばならぬのじゃ！」

「あい！」

ゲーム性が加わったからか、理歩の目が輝く。

理歩の性格を熟知したモドキならではの作戦、確かに見事だ。

こうして、モドキの策略により、無事にオムライス一味の残党を倒した理歩は、プリンという財宝を手に入れたのだった。

そっか、とりあえず色々と考えてみるかな。

目指せ！ 家族旅行成功！



数日後、理歩を保育園にお迎えに行ったときに、ママ友の遠藤^{えんどう}さんに呼び止められた。遠藤^{えんどう}さん家の美沙^{みさ}ちゃんと理歩は仲良しのお友達だ。

「薫さん！ ねえ、お知らせ見た？」

「お知らせ？ 城址公園の割引券のこと？」

「違うわよ。九月の劇の発表会、お遊戯会のこと！」
 そういえば、冷蔵庫の横に優一さんが貼ってくれていた気がする。
 まだ見ていなかった。

保育園は、電子のお知らせを導入してくれている。

昔と比べてプリントは減ったらしいのだが、まだまだ山のようにお知らせという名のプリントが我が家に舞い込む。気を抜くと、折り紙など突発的な持ち物を見過ごすから、注意が必要だ。

だが、どうにも必須項目を見落としてしまいがちなのは、私が不注意だけではなく色々な情報が混在しすぎているのも原因だと思う。

あれ……プリント冒頭の園長先生の季節の挨拶は毎回必要なのだろうか。もちろん、それを楽しみにしている人があるのは、私も理解している。

けれども、学生の頃に校長先生の挨拶で毎回眠くなってしまうって私としては、省いても良い気がする。

そのほうが、園長先生も文章を考える手間が省けると思うし。
 てか、今は、そんなの良いのよ。

えっと……九月のお遊戯会のことだったけ。

私は、スマホで電子メールのお知らせを確認する。確かに、九月にお遊戯会があることが、園長先生の挨拶のすぐ下に一行だけ書かれている。

「へえ、発表会で『白雪姫』をするのね」

この大暴れのイヤイヤ期真っ盛りの二歳児を集めて劇をやるなんて、すごいな、先生たち。

……まあ、たぶん劇とは名ばかりで、舞台の上で衣装を着て立っているだけなんだろうけど。

ご飯のお世話だけで大変な思いをしている私たちには、考えられないことだ。
 やっぱプロの保育士さんってすごいんだ。

「そう。だから、『白雪姫』の絵本を読み聞かせて、普段からお話に親しみを持たせてほしいっていうことみたいなの」

「遠藤さん、さすが。そんなことまで書いてあったのね」

確かに書かれている。お知らせを確認すれば、遠藤さんの言う通り、お遊戯会の説明と共に推奨する絵本が隅の方にいくつか挙げられていた。

「持っていないな。買わなきゃね」

『白雪姫』は理歩が好きなジャンルの絵本じゃないから、理歩に買う絵本を選ばせている我が家の本棚にはなかった。

理歩は本屋さんでお姫様の載っている本はあまり手に取らない。

猫やワンコの絵が載っている本を優先して、すぐにそちらを手に取ってしまう。

「あら、じゃあ！ 今度貸してあげるわよ！ 家に何冊かあるから」

遠藤さんが提案してくれる。

そうだった。

遠藤さんは、読書が趣味で、特にミステリが大好きで、その蔵書もすごい。

リビングにも書斎しやうさいにも、本が溢あふれている。

「あれ、でも『白雪姫』はミステリじゃないでしょ？」

なのにどうしてそんな何冊も持っているのか。

「ミステリを知るためには、伝承や民話は押さえておくべきなのよ！」

遠藤さんが熱く語る。

いかん。遠藤さんの推し活かつスイッチを押してしまったみたいだ。

「いい？ 民話をモチーフにしてミステリを展開することは、まああることなのよ！ だから、ミステリを嗜たしなむには、呪術や民話、妖怪ようかい、歴史は、知っておいて損はないの」

目がキラッキラしているぞ遠藤さん。

あの話に使われている呪術は……とか、どんどん遠藤さんの話が深みにはまっていく。

「特に民話はね……色んなバージョンがあるから……作者がどの話を元になっているかを追うと、さらに面白みが増すのよね」

ああ……なるほど、それで気になったときには何冊も買っちゃうんだ。

うん。その気持ちは私も分かんなくはない。

私の愛する推し俳優俳優であるティミー様は、海外のお方だもの。

映画は字幕バージョン、吹替バージョンと色々楽しむのは基本だ。

私は基本は字幕が好きだけれども、素敵な声優さんが甘い声を当ててくれたら、そのバージョンも観たくなるってものだ。

ともあれ、九月まではまだ半年くらいあるのだから、理歩に白雪姫とは何かを教え

込むには、まだまだ余裕がある。
それまでゆつくりと、楽しめばよいのだ。



我々は、家族旅行というプロジェクトを抱えている。

プロジェクトを不可能から可能に変えるためには、そう、訓練が必要だ。

プロジェクトは神頼みでは困るし、ミッションはインポッシブルでは困るのだ。

いや、待って、私……だいぶモドキに毒されてない？

だんだん、兵站が必要な気さえてくる。

たかが家族旅行だ。

地球の未来を救うために、はるか遠い星の海を旅するわけではない。

難攻不落の城を落とすわけでもない。

落ち着いて準備さえすれば、どうとでもなるはずだ。

ともかく、目標である家族旅行の訓練のために、行き慣れたドッグランへ私たちは

向かう。

モドキと理歩をベビーカーに乗せて、マロンをリードで繋いで歩く。

残念ながら仕事で来られなかった優一さんが、「無理はしないでくださいね」と心配そうに言っていたが、まあ、さすがに近所で行き慣れた場所だし、大丈夫だろう。

天気は良いし、春の散歩は気持ちいい。

私の前を歩くトイプードルのマロンが、可愛い尻尾をピコピコと横に振って喜んで
いる。

「カイル君いるかしら」

私がカイル君の名前を出せば、クルンとマロンが振り返ってフンフンと鼻を鳴らす。
絶対にいるの！と、主張しているようだ。

カイル君とは、ドッグランのアイドル犬だ。

すらっとしたボルゾイ犬の体躯で踊り、数多のワンコを魅了してきた。

マロンの推しなのだ。

「わんわん！」

マロンが吠える。早く行きましょう！　って言っているのだろう。

リードがぐいぐい引っ張られてピンと張っている。

「待って、マロン！」

「おお、頑張れ！ 薫よ」

いや、モドキよ。応援せずに、マロンを止めてくれ。

モドキは余裕たっぷりだが、私はお前の乗っているベビーカーがあるからマロンの歩行スビードについていけなくなっているのだよ。

案外難しいのだ、ワンコのリードを持ちながらベビーカーを押すの。

考えてみれば、マロンの散歩のときはベビーカーを押すことはなかったし、ベビーカーを押すときにはマロンをリードで歩かせることはなかった。

優一さんが一緒だと、どちらか片方を見れば良いのだから、平気だった。

一人で全部を見るのは、こんなに大変なのだと、改めて実感する。

慣れている場所でも、意外に発見はあるものだ。

なんとかドッグランに着いた私たちは、モドキが話してもバレないように周囲の人からは離れた場所に陣取って、マロンを柵の中に放す。

顔見知りのワンコたちに混じって、カイル君の姿も向こうに見える。

本日もカイル君は長い足を生かした華麗なステップで、観客ワンコたちを魅了しているようだ。

「カイル君、いたよ！ ほら、マロン！」

マロンは、私の言葉なんて聞く間もなく、カイル君にまっしぐら……あれ？ その場にへたり込んでしまった。

「マロン、どうしたの？」

「くーん」

どうしよう、病気だろうか？

私は、マロンを抱き上げる。

「心配せずとも良い。推しの尊さに腰が抜けたのだそうじゃ」

「え、腰が？」

ドッグランの真ん中では、クルリとターンを決めているカイル君。

キラキラの目で、マロンが見つめている。

「いやいや、一緒に住んでいると、似てくると言うが、ここまでとは……」

モドキが呆れてため息をつく。

「な、何よ……」

「胸に手を当てて思い出してみるが良い。ほら、この間買った映画のプレミアムセツト、アクスタフィギュア付き」

胸に手を当ててなくなつて覚えてる。

久しぶりに公開されたティミー様の映画。

お年を召されてますます演技力と美しさに磨きがかかる我が推し、ティミー様のご出演なされた映画が公開されたのだ。

だが、残念なことに、ベビー対応の映画館では上映されず、そもそも公開中は忙しくって観に行けなかった。

そこで私は、家で楽しむ用にアクスタフィギュアの特典が付いたプレミアムDVDを買ったのだ。

美しいティミー様のお姿を飾ろうと思つたのだが、想像しただけで尊すぎて、まだビニール袋も破らずに、そのままの姿で棚の一番上に飾っている。

「ええ、買ったわよ。そんなの覚えているに決まってるじゃない」

「DVDを観ているときの薫と瓜うりふた二つなのじゃ」

「ええ！ さすがに腰を抜かしては……」

いや、確かに宅配便のお兄さんから受け取った瞬間に、その場にへなへなと崩れ落ちましたか……

「ああ……うん。まあ、素敵なものを見れば、仕方ないよね」

「やれやれ、余計なところが似てしまったものじゃ。理歩も気をつけるが良いぞ！」

モドキの言葉に理歩が「あい！」と元気に答える。

「人のこと言えないくせに」

私は、減らず口を叩くモドキを睨む。

「知っているのよ、ほら！」

「な、薫！ いつ気づいた！」

「え？」

いやいや、リビングにずっとおわします、モドキの好きな時代劇の主人公——成敗せはばい將軍しょうぐんのでっかいアクスタのことを言ったのだけど？

モドキが「しまった！」と、慌てて口を押さえる。

「ねえ、まさかまた何か買ったんじゃないでしょうね？」

ふるふるとモドキは首を横に振るが、これは完全にクロだろう。
後で叱らねばなるまい。

この猫モドキは、勝手にネットで買い物をする悪い癖がある。
買うのは、オヤツか大好きな時代劇のグッズ。

多少なら私だって推し活グッズは買うし、危険がないなら認めてあげたいが、そろそろ本気でやめてもらわないと、家が大江戸になってしまいそうだ。

カイル君の華麗な動きに釘付けのマロンの横で、理歩は楽しそうに歌っている。
難解な宇宙語か悲鳴のようにも聞こえるが、きつと歌に違いない。

「きれいなあおひめしゃまあきをちゅけていんごはきつとどくいんご」

理歩の言葉は半分以上何を言っているのか聞き取れないが、『おひめしゃま』はきつと『お姫様』で『いんご』はきつと『りんご』。『お姫様』と『りんご』に、さらに『毒』が出てきたならば、きつと保育園の秋のお遊戯会でやるという『白雪姫』だ。保育園でお歌を教えてもらったのだろう。

ゆらゆら横に揺れて、手をジタバタさせているのは、振り付けだろうか。

カイル君みたいな華麗なステップとは程遠いけれども、これはこれで可愛い。

「良い良い、上手じゃぞ」

猫モドキが褒めれば、理歩は満面の笑みだ。

マロンのために来たのだが、理歩だって楽しそうだ。

ダンスして歌った後に、持ってきた麦茶を飲んで、秋に落ちてそのままになっていったのだろうドングリを集め出した。

持参したおままごとのお皿には、どんぐりが積まれていく。

理歩なりに公園を楽しめているのは良かった。

このまま、何事もなく過ごせると思っていたのよ。

「ああ、薫。そろそろ理歩は限界のようじゃ」

「そうよね、モドキ。半泣きだし」

幼児の限界は早い。

あんなに楽しそうにしていたのに、もう眉間に皺を寄せて唇を震わせている。

優一さんが一緒ならば先に理歩を連れて帰ることもできるが、今日大人は私一人。

理歩を先に連れ帰って、マロンとモドキを公園に置き去りにするわけにはいかない。

困ったな……マロンをもう少し遊ばせてあげたいのだけれども、無理だろうか。

「モドキ、なんとか時間稼ぎしてよ」

「わ、僕が？」

「だって、マロンが可哀想でしょ？」

ちらりとドッグランに目を移せば、カイル君の動きに合わせて、くるくる回っているマロンがいる。

これ、帰れって言うのは、推しのコンサートの中で呼ばれたみたいなものじゃない？

まだドッグランに来てそんなに時間が経っていないのに、マロンが可哀想だ。

せめてあと三十分……いや、二十分くらいなんとかならないだろうか。

「やれやれ可愛いマロンのためじゃ、仕方あるまい」

モドキがベビーカーを降りて、近くにあった木に登る。

「さ、さすが猫……」

猫かどうかは怪しくって仕方ないモドキだけれども、姿形は猫だ。

木に登るのが上手なのは、まあ理解できる。

だが、ぐずり出した二歳児をあやすのに、木に登ってどうなるのだろう。

「モド……」

大好きなモドキが手の届かない木の上に行ってしまった、ますます理歩の目には涙が溜まっている。

私は理歩の横にしゃがんで、なんとか理歩の機嫌を取る。

「り、理歩、ほら！ ワンコいっぱいだし！ ドングリたくさん集まって良かったね！」

「や！ ない！」

ああ、駄目だ。首を横にフルフルと振って、理歩は完全に拒絶してしまう。

これは困ったな。

マロンには申し訳ないが、今日はここで退却しなければならなさうだ。

私は諦めかけていた。いや、完全に諦めていた。

だが、援軍は来た。

——木の上から。

「理歩！ 客が来たぞ！ 冥^{うたげ}じゃ！」

モドキがスルスルと木から降りてくる。その後ろには、リスが五匹ほど付いて来ていた。

「モド！ りしゅ、りしゅいっぱい！」

見たことのないリスの群れに、理歩の目がキラッキラに輝き出す。

「皆、ドングリを買いに来た客じゃ！ ほれ、お店屋さんじゃ！」

「あい！」

可愛いお客さんを前に、理歩が張り切り出す。

理歩が配るドングリをリスが行儀よく受け取って、クルンと回ってから帰っていく。

「はわああ！ リスさんダンス上手！」

理歩はドングリを渡すたびに繰り広げられるリスのパフォーマンスに大満足のようだ。

リスのほうも、理歩が感激している様子に満更でもなさそうだ。

「モドキが呼んでくれたの？」

「当然じゃ。ドングリを報酬として渡すから、舞を一節ずつ踊ってくれるように頼んでみたのじゃ」

「リスがそんなのよく引き受けてくれたわね」

私の知っているリスという生き物は、少なくともそんなことはしないはずだ。

「ドッグランのワンコたちのアイドル活動を見て、自分たちも踊りたいと思うておる連中がおつてな」

えっと、このリスはストリートパフォーマンス的な子たちってことだろうか。

まあ、ここのドッグランのワンコを見て育てば、リスもダンス好きに育つか……たぶん？

ともかく、二歳児は上機嫌でリスと遊んでいる。

マロンが満足してくれるまでは、なんとか間が持ちそうだな。

「これにて一件落着じゃな！」

猫モドキが満足そうにゴロゴロと喉を鳴らしていた。



僕、優一は、今日は大学の研究室に来ている。

スマホを見れば、薫さんから理歩たちがドッグラン周辺に棲んでいるタイワンリスたちと遊んでいる画像が送られてくる。薫さん一人でマロンや理歩を見るのは大変なのではないかと心配していたのだが、楽しそうで良かった。

『春風やユリに挟まれ討ち死にす 牛のお尻に腕を突っ込む』

この春、同じゼミ生だった小松伸之は、この辞世の句をゼミ室の壁に貼って卒業した。もちろん小松は生きている。小松は卒業後、地方公務員として家畜保健衛生所で働き始めた。

配属地がはるか遠くの島になったので、このゼミ室に顔を出せなくなってしまうた悲しみを込めて、辞世の句を詠んだというわけだ。

「牛のお尻に腕を突っ込むのは、家畜保健衛生所で働くんだから牛の直腸検査頑張るぞ！ ってことだろうけれどもさ、ユリで討ち死にってなんだろうね？」

これは、西島さつきがこの小松渾身の辞世の句を見た感想。

優秀な西島は卒業後、助教になって大学で研究を続けている。

「全くですね。まるつきり意味が分かりません。句としては、最低の部類ですね」

オーバードクターとしてゼミ室に残っている帰国子女の東山クララが、縦巻きロールの

髪を弄りながら西島に賛同する。

「チクショーー！」

ここにいない小松の気持ちを代弁するかのように、ゼミの愛鳥であるオウムの小梅が叫ぶ。

二人には悪いが、僕としては小松の気持ちが痛いほど分かる。

うん、だって、ほら……

「西島さん、今日のおやつにクッキーを焼いてまいりましたのよ」

「あ、ごめん。今日はいいや。すぐ出る」

「やだ、そつでしたの！ おっしやってくれば良かったですねー！」

うん、だって、ほら……

僕もすっかり二人に挟まれて、肩身が狭いし。

僕は途中で休学していたから、あと一年で卒業だが、小松のいない今、西島と東山に挟まれているのは、なんだか居心地が悪い。

元々は仲が悪かった二人なのだが、仲良くなってから東山は西島にベッタリだ。

ほぼ一日で別れたものの西島の元力である小松としては、面白くなかったことも理解

できる。

しかし、二人の間には百合の関係というか、特別な感情はないかもしれない。仲の良い二人にヤキモチを焼いた小松の妄想の可能性もある。

でも、西島が小梅から東山を守って以来、東山が極端に彼女に傾倒してしまったのは確かだ。

恋愛感情が東山にあるのかは、もちろん分からないし、あったところで別に構わない。

「ちよっと！ おとうさん・ど・りほっち！」

「あ、ええ？ なんですか？」

西島と呼ばれて、僕は慌てて返事をする。

お父さんと呼ばれる可能性があるのは、さすがに僕だろう。

相変わらず、無茶苦茶な呼び方だ。

「あら、いたんですね」とは、東山。

西島以外にも視界に入れてくれるとすぐ助かる。

「なんかさ、『討ち死に』なんて書いてて小松が病んでいそうだから、いつか小松島まで遊びに行かない？」

「いえ、赴任先が離島だっただけで、別に小松の島ではないですね」

無人島に赴任するなんて、そんな可哀想な事態にはなっていないだろう。

「あら、いいですね！ バカンスですね！」

東山が喜ぶ。

「僕はちよっと今年は無理ですね」

「だよな。だって、理歩が離島までの船に耐えられそうにないもの」

そう、西島が言う通り、揺れる船に長時間耐えるのは大人だって難しい。ギャン泣きどころではなく、具合が悪くなってしまうかもしれない。

「家族を置いていくのは、薫さんの負担になりそうで嫌です」

僕が何日も家を離れれば、幼い理歩の世話は薫さん一人でしなければならなくなる。

薫さんだって仕事があるというのに、それは困る。

優しい薫さんならば、行っておいでよって言ってくれそうだけれども、僕が遊びに行くのに、薫さんに負担をかけてしまうのは気が引ける。

「そうですわよね。小さな子どもがいるのですもの」

東山も分かってくれたようだ。

「考えてみれば大変だよ。共稼ぎの人って、パートナーが長期出張に行くときとか、どうしているんだろう」

「ああ、そうですね。レジャーなら、子どもが小さなうちは諦めることもできますが、仕事で留守にするなら、やむにやまれないときってありそうですね」

本当、どうしているのだろう。

我が家は、僕も薫さんも長期で出張なんてない職業だけど、職種によっては避けて通れないはずだ。

僕が小さい頃は、両親は働きに出ていたから、祖母の家によく預けられていた。

祖母はその頃から獣医師診療所を営んでいたから、周りには動物がたくさんいたことを覚えている。

実家で飼っていた猫、ラクシユも僕の祖母であるおソノ婆ちゃんの診療所で出会ったのだ。

「長期で両親が忙しいときはベビーシッターを雇ってありましたわ」

東山が自分の小さな頃を思い出して教えてくれる。

「とても良いシッターさんで、一緒に遊んでくださいましたのよ」

「わ、お金持ち！ 私は爺ちゃんっ子で、爺ちゃんがマタギだったから。小学校くらいのときは爺ちゃんと山をウロウロしてたかな」

「マタギ……」

子供には危険ではないだろうか？

山で野生動物と対決する西島が脳内に浮かぶ。

蓑笠で銃を持って、祖父と一緒に野山を駆け巡る少女西島……あ……うん。案外、しっくくり。

「犬と一緒に爺ちゃんにくっついて歩いて、爺ちゃんの猫を隣で見えたり、仕掛けた罠の確認をして回ったり、楽しかったなあ……」

「西島のサバゲー好きとか、野生動物好きとかは、そんな経験がもとになっているのかもしれないね」

確か、たかみーという名の犬を飼っていると言っていたなあ……

爺ちゃんの猟犬のことを言っていたのかもしれない。

「ああ、そうだね。きっと影響はあると思う。山の知識も爺ちゃんから聞いたし」

「カッコイイ！ 素敵ですわー！」

東山が、激しく手を叩いてスタンディングオベーションで感激する横で、「チクショー！」と小梅がまた絶叫していた。



ドッグランに行った日から一週間後。

私、本田薫は本日、保育園のママ友の遠藤さんの家にいる。

理歩とぬいぐるみに擬態したモドキと一緒に、遠藤さんに『白雪姫』の絵本を借りて来たのだ。

遠藤さんの部屋に入るなり、目に入るのは圧巻の本棚だ。

前に来たときには、まだ本棚の上には何も載っていなかったはずだが、今ではそこも棚の一部と化して本が並んでいる。

わずかな隙間さえ許されない、本で埋め尽くされた空間がそこにあった。

「すごい……また増えてる……」

「そうなのよ。ちよつと目を離れた隙に、こう……本が細胞分裂を繰り返してね……」

遠藤さん？ 本は、そんな増え方はしないから。

遠藤さんが買わない限り、この部屋の本は増えるわけがないのよ。

「んふふふ！ それよりも、これ、これよ！」

遠藤さんが私に本を渡してくる。

表紙には『魔女っ子裁判の異議あり』俺野古汰、と書かれている。

「これ！ まだ紹介していなかったわよね？ すっごくお勧めなの！」

満面の笑みの遠藤さん。

ミステリ好きの遠藤さんは、私にミステリを勧めるのを趣味の一つとしている。

ええっと、貸してくれたのは、最初は『オカシラと味噌塗りの蔵』で、『百年の誰やねん』で、その次は、この本ってことか。

毎回遠藤さんとはとても面白い本を紹介してくれるから、この本もきつと面白いのだろう。

「この本はね、魔女ではないという、ないことを証明する『悪魔の証明』に真っ向から挑んだ作品なのよ。丁寧な描写で、中世の世界に引き込まれて、わくわくしちゃうの！ それがさ、最後の最後で、憎い論調で予定調和を崩して驚かせてくれるのよ

ね！」

いかん。白雪姫が遠藤さんの頭からすっかり抜け落ちて、推し語りが止まらない。
「ママ、落ち着いて」

美沙ちゃんが遠藤さんのスカートを引っ張る。

前から思っていたけれども、美沙ちゃんって本当にしっかりしている。

成長の度合いなんて、それぞれだし、私は小さな頃は誰よりもボーッとしていたという母の証言もある。だから、理歩を悪いなんて思わないのだけれども、同じ二歳児とは思えない賢さだ。

「あら、ごめんごめん。『白雪姫』だったわね」

「うん。りっちゃんに早く見せてあげたい」

美沙ちゃんに言われて、遠藤さんが慌てて絵本を数冊、机の上に並べる。

「ひめしやま！ いっぱい！」

理歩が目輝かせる。

「えっと、これが保育園のイチ推しで、こっちはちょっと難しめ。ああ、これはすごく可愛い絵で……」

『白雪姫』にこんなにバリエーションがあるなんて、思ってもみなかった。

「原作のグリム童話では、ちよつと残酷なのよね。そもそも、白雪姫の美しさの表現が、黒檀くろくたんのように黒い髪、雪のように白い肌、そして、血のように赤い頬だものね……ワクワクしちゃう」

え、白雪姫ってそんな話？

恍惚くうこうとしている遠藤さんには悪いけれど、その描写で私はワクワクはしない。

美沙ちゃんは横でウンウンと首を縦に振っているけれども、そこに同意できる幼児、美沙ちゃんすごいな。

「グリム兄弟は、伝承を収集して童話にまとめたんだけど、伝承って結構残酷で理不尽な作品も多いのよ」

「そうなんだ。私の知っている『白雪姫』は、乙女おとめの夢全開の素敵な童話だけれどもね」

継母まははにいじめられるのは可哀想だが、その後小人こびとに助けられて素敵な王子様とハッピーエンドなもの。

王道のときめきラブストーリーだ。

「あら、薫さん、ホラーも好きそうだから、原作もいけると思うわよ」

「私がホラー好き？」

「ええ、だって、そのイワクつきのぬいぐるみ、お祓いもせず^{はち}にまだ大事にしているし」

遠藤さんが指したのは、理歩にスリスリされながらも、ぬいぐるみのフリをしてジツとしているモドキだ。

遠藤さんは、モドキを霊が憑依^{ひょうい}した動く呪いのぬいぐるみだと信じている。

「あ、ああ……まあね。なんか愛着があつて……そうね、ホラーも好きかも」

遠藤さんには言えないが、祓うわけにはいかないのよ、この猫モドキは。大事な家族なの。

「だったら、これ！ 一緒に行かない？」

遠藤さんがチラシを取り出して勧めてきたのは、日付を見ると、ゴールデンウィークに開催されるイベントだった。

「西京極冬彦……」

書かれていたのは、「西京極冬彦」という名前。

立ち読みサンプル はここまで

「この西京極冬彦って聞いたことがある！」

「そう！ 良かった！ ほら、あの本よ！」

遠藤さんが取り出したのは、ずっと大切に置かれている棚の最上部のあの分厚い本だった。

おおよそ一冊の本とは思えない厚さ。仰向けに寝転んで読んでいたら、寝落ちしたときに当たりどころによつては命を失うんじゃないかと思える重厚な本。

それが、西京極冬彦の本だった。

本に詳しくない私でも、テレビアニメだったか映画だったかで、確かに聞いたことのある名前だ。

「遠藤さん、こんな分厚い本を読むなんてすごい」

「ううん、西京極先生の本は、すごく内容が濃いいし、背幅も厚いんだけど、不思議とスルスル読めてしまうのよね。なんだろう。やっぱり本を開いたときの美しさなんかも関係しているのかな？ 作品の世界に引き込まれるのよね」

本にスリスリと頬ずりしながら遠藤さんは雄弁に語る。

「で、この西京極冬彦先生のイベントが、五月にあるの？」